

# 聖書とコーランにおける終末論の現代的意義

渡邊 晓

Contemporary significance of eschatology in the Bible and the Koran

Satoshi Watanabe

## Abstract

People have continued self-forming in some social relationships among family, community, religion and nations. Is there any spiritual foundation for self-forming in current Japanese society?

Unlike Western and Middle East countries in which the human spiritual foundation is based on Christian value and Islamic value, in Japan the lack of values and principles have been pointed out by many researchers. I wonder it is possible to create new solidarity and social ties in Japan.

I think it is impossible to create the new solidarity in the future in Japan, without each people's independence, And I came to the thought that Eschatology in the Bible and the Koran would be a help to stimulate individual independence and to create a new solidarity. Therefore, I summarize the views of philosophers and researchers who discuss Eschatological beliefs in the Bible and the Koran, and I examine the possibility of Eschatology in Japan.

**Key words:** Bible, Koran, Eschatology, Basic Income

## はじめに

現在、わが国は都市部の人口集中や地方農村の過疎化により、伝統的な村や町などの地域共同体が消失し、昨今の雇用の変化に伴い、共同体を実感する場ともなっていた会社という日本独自の共生圏も、その役割が大きく変化してきている。

人は家族や地域社会、国家や宗教など何らかの社会的な関係性の中で自己形成していく。しかし、人々に帰属感を与え、共同体を実感する場となっていたものが次第に失われつつある中で、失われたかつての共同体に代わりうるものはなんであろうか。社会のなかで自己形成していくための十分な精神基盤たりうるものが現在のわが国にはあるのであろうか。

まがりなりにもキリスト教的価値観やイスラーム的価値観を人間の精神基盤とする欧米や中東諸国の場合と異なり、それに匹敵するような意味での“価値原理の不在”が多くの研究者たちによって指摘されている。わが国において、果たして新たな連帯や社会的紐帶の創出は可能なのだろうか。

私は今後のわが国における新たな連帯の創出は、ひとり一人の「個」の自律性なくして成立しないのではないだろうかと考える。そして、各人に「個」の自律性を促し、新たな

連帶を創出していく一助として、聖書とコーランにおける終末論があるのではないかと考えるに至った。そこで、聖書とコーランにおける終末論について論じている思想家や研究者の見解をまとめ、わが国における終末論の可能性について検討する。

### 1. わが国における普遍的な価値原理の不在状況

キリスト教的価値観は日本人には馴染まないと言う人がいるが果たしてそうか。陽明学者、思想家の安岡正篤は、曲学阿世の文化人がそのように考えていると指摘し、以下のように述べている。

「日本人はそんな無能ではない。むしろこれは恐るべきというか不可思議なる潜在能力、潜在勢力を持つ民族なのであります。歴史的に見ても、仏教が渡来すれば仏教を究め、老莊思想が入ってくればそれに飛びつき、キリスト教があればキリスト教になじみます。学問でも信仰でも芸術でも、それこそ酒でも料理でも何でも自由自在に取り入れる。もちろん食中りもあったでしょうが、しかしこの不思議な能力は謙虚に研究すべきであります。」  
(安岡,2005)<sup>1)</sup>

わが国は明治期以降、欧米列強の進出に直面する中で、西欧近代の思考枠組み及び技術へのいわば「文明の乗り換え」を行った。しかしその基盤にある価値原理（キリスト教）は受容せず、かつ江戸期までの（仏教・儒教の）価値原理は切り捨てていった為、ここに“普遍的な価値原理の不在”という目に見えにくい、しかし深刻な事態が生じたことになる。

内村鑑三は、明治国家が採用した文明開化は、西欧文明の根幹をなす価値原理であるキリスト教を置き去りにしたままの軽薄な政策であると主張し、殖産興業、富国強兵は挫折の憂き目をみると、強く批判した。宗教学者の山折哲雄（2008）<sup>2)</sup>によると内村の「このような考え方ほんの一握りの知的エリートに迎えられただけで、世間からはほとんど無視されてしまった。キリスト教の思想を、プラトンや孔子や親鸞に関する書物を読むように知的な教養として受け入れる層はどんどん広がっていったけれども、それをライフスタイルの水準で受容しようとする層はごくごく限られていた。ましていわんや、キリスト教を武士道に接ぎ木しようとした内村鑑三の意図を理解する者はほとんど皆無に近かったといつていい。」と指摘している。

内村鑑三の主張から一世紀以上が過ぎた現在、わが国は第二次大戦の敗戦により、明治政府が置換しようとした天皇を中心とするナショナリズム的な価値原理をも否定されることになり、戦後の日本社会は文字通り“価値原理の空白”に置かれることになった。現在のわが国は、普遍的な価値の構築が求められている時代にあるといえよう。それでは、このような時代にわが国において、聖書とコーランにおける終末論が果たす役割とはなんであろうか。

## 2. 芦名定道と小原克博の「終わり」に関しての見解

キリスト教思想家の芦名定道は、現代人に求められているのは「終わり」から、人間にについて問い合わせるという発想の転換であると指摘しつつ以下のように述べている。

「終わりは、個人も集団も、そして生物の種としての人類でさえも、すべて有限である、という事実を指し示している。個人としての人間は、自分の死によって時間的に限界づけられており、これによって個性をもった一人の人間として生きているのである。永遠に続く時間の中で、どうして人間は個としてのアイデンティティをなおも保ち得るのであろうか。有限性こそが、わたしたち人間の真の姿であり、終わりの意識は、この真相にわたしたちが目覚めるきっかけとなるのである。したがって、終わり、終末について考えるということは、人間とは何か、自分とは何者か、という根本的な問いを、再び問い合わせることを意味しているのである。」（芦名,2001）<sup>3)</sup>

また、同じくキリスト教思想家の中原克博は生と死を排他的にとらえ、そのいずれかに至る選別のための道のりとして默示的終末論を受容することの意味は、默示的終末論が有する積極面を継承しつつ、負の側面を乗り越えていくことであるとして、生態学終末論を提案している。つまり、「反エコロジー的要素を多分に含んだ默示的終末論を全面的に破棄するのではなく、むしろ、伝統的終末論への批判的問い合わせを内包したエコロジー思想をあえて導入することによって、安易な自己正当化を許さない内的緊張関係と対外的（公共的）責任意識をともなった終末論を形成していくことができるのではなかろうか」（中原,2001）<sup>4)</sup>というものである。

## 3. 默示的終末論の問題点と「義と愛」について

默示的終末論は現代の聖書学においてどのような評価を受けているか。ここでは、旧約聖書学者である関根清三の示唆についてまとめ紹介する。

関根清三は默示的終末論の疑わしさについて四つの観点から指摘している。①他人の罪業に対する刑罰を神の手に委ねることにより、終末の日の審判の叙述が必要以上に残酷になる。②天変地異や戦争を、いたずらに神の審判と繋ぎあわせるという非科学的な発想が見られる。③信者を支配統制するための脅しの道具として使用される。④終末論は、文字通りにはほとんど全てはずれた。

默示的終末論には、終末の到来における生命を約束される者と死を宣告される者という、生と死の二元論的峻別がみられる。永遠の命と豊かな恩寵に浴するか、あるいは永久の滅びに至るかという裁きの前に立つことによって、信徒は終末の到来の切迫感に駆られるのである。

しかし、中原（2001）<sup>5)</sup>によれば、終末論は否定的な意味でのみ語られてきたわけではないという。

「たとえば、ユダヤ・キリスト教やイスラームの文化圏では、自立した個の確立や人格概念の形成が終末論によって促されたことが、しばしば指摘されている。なぜなら、「終わりの日」に、すでに死んだ人も含め、すべての人が神の前に立たされ判決を受けなければ

ならないという思想は、自ら責任を負う「個」としての人間を発見したと考えられるからである。」<sup>6)</sup> というように小原は、終末論が個の強度を育んできたことに言及している。

ところで、関根は、著書「旧約聖書の思想 24 の断章」の中の 3 章を預言者アモスについて記している。関根によるとアモスをひたすら終末の審判を告知した預言者であると捉えるのは、一面的な見方に過ぎないとし、アモスには義と愛の両面があると示唆している。

「アモスは、富める者が貧しい者から、法にかなう形で構造的に搾取することを、悪であるとした。それを改め、『惡を憎み、善を愛』さなければ、終末の審きが到来することを預言した。それが、この民を愛し、しかしこの民に背かれ続けた神からの、当然の報いであると信じた。しかし、この民が悔い改め、神に立ち帰る素振りを見せない時、アモスは最後的な終末の審判を告知せざるを得なかった。しかし、それは同時に、この民の中の、富める悪い者によって搾取されている貧しく正しい人を救い取ることをも意味した。終末とはそのような意味で時代の更新であり、義の回復なのである。そして義とは、我利を貪り私服を肥やす悪が滅んで、善なる人々が和合し、社会が調和すること、互いの共存の定めに従うことにはかならなかった。」(関根,1998) <sup>6)</sup>

そして、関根はアモス的な愛即義の思想の重みを再確認するとして以下のように論じる。

「アモスによれば、義とは、互いのアガペーが溢れて、私欲を肥やす悪を滅ぼし、自分に価値がないかに見える人々とも共存し、社会が平和と繁栄に満たされることであった。そのような愛に裏打ちされた義を打ち立てることが、彼の終末論の眼目だった。これが基本である。罪人がそのようなアガペーに目を開くためにアモスは配慮し続けたが、どこまでも頑な惡の現実を目の当たりにして、最後は神の審判を告知せざるを得なかった。だがアガペーの本質が、自分に価値がない人も愛することならば、それは窮屈的には、第二イザヤのように自らが惡の犠牲となってアガペーを実践することとなり得るし、ならねばならない。しかしこれはあくまで窮屈であって、愛即義を成就するという基本を追求するために人知を尽くすこと、他方で我々は諦めてはならない。以上が、旧約の終末論を瞥見して来ての結論となろうかと思う。」(関根,1998) <sup>7)</sup>

聖書の終末論は、関根が論じるように、神任せにして能動的な問題をなおざりにする、恐怖心を搔き立てるなど、多くの負の側面を秘めつつも、一方で、自立した個の確立や人格概念を形成するなど正の側面も併せもつと考えられる。神の無限の愛とも通じ、現代的な意味を持ち得ると言えよう。

#### 4. わが国におけるイスラーム文化の現代的意義

イスラーム・東洋思想研究者の井筒俊彦は、イスラーム文化の現代的意義について、オイル・ショックに始まり、ホメイニーのイラン革命、人質問題、ついでイラン・イラク戦争など、わが国の経済生活に直結する時局的意義とは別に、第 2 の意味があるとして以下のように述べている。

「現代の日本人にとって、中国文化や西欧文化は—そしてインド文化もある程度まで—

見なれた隣人の文化であります。これに反してイスラームはわれわれにとって文字通り異邦人、隣人にはなりはしたもの、まことに妙な隣人の文化です。イスラームとはいっていい何なのか、イスラーム教徒（ムスリム）と呼ばれる人たちは何をどう考えているのか、彼らはどういう状況で、何にどう反応するのか、イスラームという文化はいったいどんな本質構造をもっているのか、一それをわれわれは的確に把えなければならない。それがはつきり主体的に呑みこめないかぎり、イスラームを含む多元的国際社会なるものを、具体的な形で構想したり、云々したりすることはできないからであります。イスラームという宗教の性格、イスラームという文化の機構が根源的な形で把握されてはじめて、イスラームはわれわれ日本人の複数座標軸的な世界意識の構成要素としてわれわれのうちに創造的に機能することができるようになるであります。」（井筒,1994）<sup>8)</sup>

現在、地球的規模で統一化への道を進みつつある国際社会のなかで、われわれの直面するすべての深刻な問題を考える際の思考の座標軸として、グローバルな視点、そして、イスラーム文化についての理解を、今までとは違った真剣さで考えていかなければならぬということなのだろう。

## 5. イスラーム教徒の連帯意識と終末理解

今日、このイスラーム文化の根柢にあってすべてを統一している書物であり、全世界のイスラーム教徒の共同体としてのアイデンティティの原点といえるものが、聖典『コーラン』である。預言者ムハンマドが神の啓示を受けて、その神の言葉が記録されることによって成立したといわれる書物である。中東諸国では現在においても砂漠的人間の精神からくる民族や部族間どうしの争い、井筒（1994）<sup>9)</sup>の表現を借りれば「血縁意識に基づく部族間連帯性という社会構成の原理」が働き、部族間どうしが互いに激しく対立し、争っている。しかし、イスラーム世界には人間どうし、部族どうしの差異を包み込む連帯意識がある。中東諸国におけるイスラームの根柢には、すべてのイスラーム教徒は神の啓示に基づいた、コーランで結びついたひとつの信仰共同体に属しているのだという強烈な連帯意識が存在するのである。コーランは「これ、すべての人間どもよ、我らはお前たちを男と女に分けて創り、お前たちを多くの種族に分ち、部族に分けた」（井筒,1958）<sup>10)</sup>としている。つまり、最重要なのはイスラーム共同体を形成するイスラーム教徒としての紐帶であり、その他の民族や部族意識はその下位に位置するものようである。

さて、コーランには「最後の審判」と結びついた終末論が描かれている。コーランにより導きだされたイスラーム教徒の終末理解によれば、この世においてどのように生きたかが最後の審判で問われ、その結果、天国と地獄に振り分けられる。このような確信がコーラン全体の基礎をなし、その上にコーランの世界観が展開しているのである。このイスラーム教徒の終末理解はイスラーム独自のものでないことは、本稿の記述からも明らかであろう。イスラーム教とキリスト教の間には終末論における相関関係がみられる。

たとえば、小原はイランの元大統領モハマド・ハタミに代表されるイスラーム知識人た

ちの間に広がりつつある宗教リバーリズムの精神は、イスラームの新しい自己理解を予感させるとして以下のように述べている。

ハタミが「いかなる宗教にも絶対の真理はない」と語るとき[ハタミ、2000]、それは西欧世界とうまく渡り合っていこうという便宜的な言葉ではなく、むしろ終末論的思考の一つの帰結であると考えるべきである。つまり、この世の終わりにならなければ、ある行為や事柄の真理性はわからないという伝統的終末理解の現代的展開がそこにはある。それが宗教多元社会を生きていく知恵の一つであることに、イスラーム世界とキリスト教世界の双方が気づき始めることによって、安直な「イスラーム脅威論」の弊害を未然に防ぐ道も開けてくるのではなかろうか。（小原,2001）<sup>11)</sup>

ところで、現代社会は、地域の特性を重視する「ローカル化」と世界を普遍化する「グローバル化」が、同時平行で共存するのが特徴であるといわれている。中東の個々のローカルな社会の学びからグローバルな視野を育むともいえる。かつて、無条件に社会の根柢にあるものとみなされてきたイスラームと、コーランにおける終末論は、グローバル化のなかで、新たな意味と役割を持ち、中東の人々のアイデンティティになっている。

現在、イスラーム的な生き方を選ぶ人々の間では、イスラーム的な生き方への問い合わせに対して、地域の特性によっても、さまざまな答えや解釈が模索されている。キリスト教的な生き方を選ぶ人々も、仏教的な生き方を選ぶ人々もまた然りである。そして、近代から始まったグローバリゼーションの中で、わが国は、イスラームやキリスト教的な思想をはじめとする、私たちの周りの他のすべてのアイデンティティとの関連で、私たち自身のアイデンティティの創出と再構築を促す環境が整えられていると思われる。

### おわりに　人間の生きる道

文筆家の佐藤優は、キリスト教神学的な議論は現在の日本の社会を強化することに有効であるとし、以下のように述べている。

「ここで重要なのは、人間が究極的なもの（愛、平和）に至るためにには、究極以前のものの（国家、社会、家族、会社）を通じる道しかないということです。ただし、究極以前のものが支配する領域で、努力を積み重ねたからといって、究極的なものに移行できるわけでもありません。究極的なものに至るには外部からの力、日本的な伝統で言うならば、縁のようなものが必要です。この縁のことをキリスト教神学では啓示と言っているのです。国家も社会もしょせんは不完全な究極以前のことがらです。しかし、不完全であるがゆえに重要なことです。なぜなら不完全なものを、われわれの努力によって究極的なものに少しでも近づけていくことが可能だからです。」（佐藤,2007）<sup>12)</sup>

現在、わが国は新しい政策構想としてベーシック・インカムが話題にあがっている。ベーシック・インカムは、基本的な生活を維持できるだけの費用を各人に無条件に保障しようという構想である。

ベーシック・インカムは人が生まれた瞬間から死ぬ瞬間まで、そのかけがえのない生存

に対する保障であるとも考えられる。すべての人がどんな状態であっても、その存在を全面肯定するという意味において、私はベーシック・インカムに共感を抱いている。しかし、普遍的な価値の構築がないまま、ベーシック・インカムが導入されることは大きな危険を伴うと考えられる。

介護福祉士でライターの白崎朝子は、「個」として生きるという意識を獲得しないまま、ベーシック・インカムが導入されると、DVや虐待などの問題がより複雑化する可能性があるとして以下のように述べる。

「ベーシック・インカムの導入は、長いこと世帯単位のものとして変革する意味では、革命的なシステムだと思う。しかし、現状ではベーシック・インカムを支持する人達ですら、性別役割分業と家父長制を内面化している。現在の政府にとって都合が良い社会保障体制は、性別役割分業や家父長制に裏打ちされた世帯単位の理念によって貫徹されている。また多くの人々がそのことに矛盾を感じず、無意識にシステムを支えている。

男女問わず、骨の髓まで内面化された性別役割分業の意識を変革するのは、容易なことではない。パウロ・フレイレも提唱し、アメリカの公民権運動やウーマンリブ運動等で実践されてきたコンシャスネス・レイジング運動のような意識変革が、ベーシック・インカム運動と共に必要ではないかと思う。」（白崎,2010）<sup>13)</sup>

ところで、これは安直な論理と飛躍になるかとは思うが、ベーシック・インカムを新たな連帯の創出及び佐藤の言う「究極的なもの」と考え、現行の社会保障制度を「究極以前のもの」と捉えてみるとどうか。

社会政策研究者の山森亮は、「現実に存在する制度を変革していくとの先に、ベーシック・インカムを考えることができる」（山森,2009）<sup>14)</sup>と主張するが、私も同感である。山森のいうように、年金が税財源化され、児童手当が普及化・増額され、給付型税額控除が導入されれば、多くの人がいわば部分的なベーシック・インカムを手にすることになる。

現在、わが国において全面的なベーシック・インカムの導入は不可能だと思われる。今、可能なことは究極的なものを求めて究極以前のもののなかで、模索しつつ歩むよりほかない。「個」の自律性を促し、世界のグローバル化と新たな価値原理を生成と連帯の創出を目指していく上で、意味のある多様かつ豊穣な聖書とコーランにおける終末論から受ける示唆は、現代のわが国において意義のあることだと思われる。

人間は、真理と非真理との中間に存在する。人間は、けっして、決定的な真理を把握したり、実現したり、達成し終えたりすることのできないものである。それゆえ、せめて、いつの日にか将来、これまでとは異なった、より本来的な別の世界の開始が到来することを希求しながら、この葛藤にみちた現実のなかを、模索しつつ歩み、少しずつ漸進していくよりほかには、人間にとって生きる道は存在しないのである。<sup>15)</sup>

渡邊二郎

## [注]

- 1) 安岡正篤 (2005) 『孟子—不安と混迷の時代だからこそ』 PHP 研究所 190 - 191 頁
- 2) 山折哲雄 (2008) 『信じる宗教、感ずる宗教』 中央公論新社 107 頁
- 3) 芦名定道・小原克博 (2001) 『キリスト教と現代—終末思想の歴史的展開』 世界思想社 233 頁
- 4) 芦名定道・小原克博 (2001) 前掲書 世界思想社 206 頁
- 5) 芦名定道・小原克博 (2001) 前掲書 世界思想社 206 頁
- 6) 関根清三 (1998) 『旧約聖書の思想 24 の断章』 岩波書店 265 頁
- 7) 関根清三 (1998) 前掲書 岩波書店 271 頁
- 8) 井筒俊彦 (1994) 『イスラーム文化—その根柢にあるもの』 岩波書店 18 - 19 頁
- 9) 井筒俊彦 (1994) 前掲書 岩波書店 117 頁
- 10) 井筒俊彦訳 (1958) 『コーラン (下)』 岩波書店 165 頁
- 11) 芦名定道・小原克博 (2001) 前掲書 世界思想社 239 - 240 頁
- 12) 佐藤優 (2007) 『国家論—日本社会をどう強化するか』 日本放送出版社協会 308 - 309 頁
- 13) 白崎朝子 (2010) 「内なるステイグマからの解放—個の自律にむけて」 『現代思想 6 月号』 青土社 138 頁
- 14) 山森亮 (2009) 『ベーシック・インカム入門—無条件給付の基本所得を考える』 光文社 266 - 267 頁
- 15) 渡邊二郎 (2009) 『自己を見つめる』 左右社 209 頁

## [参考文献]

- 芦名定道 (2007) 『自然神学再考—近代世界とキリスト教』 晃洋書房
- 芦名定道[他] (2014) 『科学時代を生きる宗教—過去と現在 そして未来へ』 北樹出版
- 萱野稔人[編] (2012) 『ベーシックインカムは究極の社会保障か—「競争」と「平等」のセーフティネット』 堀之内出版
- 酒井潔・岡野浩[編] (2010) 『考える福祉』 東洋館出版社
- 酒井哲子 (2010) 『〈中東〉の考え方』 講談社現代新書
- 関根清三 (2008) 『旧約聖書と哲学—現代の問いのなかの一神教』 岩波書店
- 立岩真也・斎藤拓 (2010) 『ベーシック・インカム—分配する最小国家の可能性』 青土社
- 中村廣治郎 (2002) 『イスラムの宗教思想—ガザーリーとその周辺』 岩波書店
- 広井良典 (2009) 『コミュニティを問い合わせなおす一つながら・都市・日本社会の未来』 筑摩書房
- 森孝一[編] (2008) 『ユダヤ教・キリスト教・イスラームは共存できるか— 一神教世界の現在』 明石書店

Reinhold Niebuhr (1932) The Contribution of Religion to Social Work, Columbia University Press(=高橋義文・西川淑子訳 (2010)『ソーシャルワークを支える宗教の視点—その意義と課題』聖学院大学出版会

李慶愛 (2003)『内村鑑三のキリスト教思想—贖罪論と終末論を中心として』九州大学出版会